

令和 5 年 6 月 10 日現在

機関番号：32683

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2022

課題番号：18K12592

研究課題名（和文）苦悩に対処する社会装置としての儀礼に関する人類学的研究：エチオピアの事例から

研究課題名（英文）Anthropological study on ritual as a social device for coping with suffering:
the case of Ethiopia

研究代表者

松波 康男（Matsunami, Yasuo）

明治学院大学・社会学部・准教授

研究者番号：90811125

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究のおもな成果は以下2点である。1)2000年代後半エチオピアは経済成長を遂げたが、農村部では国内外の資本による土地収奪が急速に進み、そこに見られる異なる民族帰属をもつ人々の関係性も緊張化していた。このような社会状況で、当地で定期的に行われている宗教儀礼が、コミュニティの成員同士のみならず、民族的他者同士のコミュニケーションの経路となっていることが明らかとなった。2)オロミア州東ショア地区で盛んにみられる、イスラームに由来するハドラ集会には多くのキリスト教徒が参加している。その儀礼参加者が実践する地域的な参詣儀礼で人々が経験するランドスケープの聖性、及びその構築性を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究はエチオピア農村社会にみられる儀礼の問題解決並びに治癒的側面に注目して、人々の苦悩への対処の実践のあり方を考察した。2000年代後半、エチオピアはアフリカ屈指の経済成長を遂げたが、この間、農村部では、国内外の資本による大規模な土地収奪と農業開発が急速に進んだ。また、2020年前後から政治的に大きな変化が生じたことで国内各地の情勢が不安定化し、民族間対立が激化するなどした。このような状況下で暮らす農村社会の人々にとって儀礼実践がどのような意味を持つのかをフィールドワークに基づき考察した。結果として儀礼実践が民族的他者同士のコミュニケーションの経路となっていることが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：The main findings of this study are as follows: 1) Ethiopia experienced economic growth in the late 2000s, but land grabbing by domestic and foreign capital was rapidly progressing in rural areas, and the relationships among people of different ethnic affiliations in these areas were becoming strained. This study reveals that regularly conducted religious rituals held in the area have become a channel of communication not only among community members, but also among ethnic others. 2) Many Christians participate in the Islamic-derived hadra ritual that flourish in the East-Showa region of Oromia. This study discussed the sacredness of the landscape and its constructedness as experienced by the participants in the local pilgrimage rituals practiced by the participants.

研究分野：人類学

キーワード：儀礼 参詣 オロモ エチオピア

1. 研究開始当初の背景

本研究は、エチオピア・オロモ社会における苦悩への対処の社会的実践に注目するものである。同社会で「悩み持ち」と概念化されている、苦悩を抱えて生きる人々を取り上げ、当該社会にみられる儀礼の問題解決並びに治癒的側面に注目して、人々の苦悩への対処の実践のあり方を明らかとする。エチオピア・オロモ社会ではハドラと呼ばれる祈祷集会を定期的開催する習慣がみられる。そこでは宗教、性別、年齢を問わず、苦悩を抱えた人々がそれを吐露し、他の参加者から祈祷を受けたり、精霊から助言を与えられたりする機会ともなっている。本研究は、人びとが自らの苦悩を解決するためにどのような方法をとるのか、そしてそれがどのような内容であり、どのような条件が揃えば儀礼に持ち込まれるのか、さらに儀礼では苦悩の原因の説明や解決の術がどのように与えられ、それがどのように個人に受け入れられたり疑われたりするののかについて明らかにし、当該社会の人々の苦悩を巡る実践について人類学的な観点から考察するものである。

2. 研究の目的

本研究は、エチオピア・オロモ社会にみられる儀礼を人々の苦悩に対処する社会装置と捉え、人々が自らの苦悩を解決するためにどのような方法をとるのか、そしてそれがどのような内容であり、どのような条件が揃えば儀礼に持ち込まれるのか、さらに儀礼では苦悩の原因の説明や解決の術がどのように与えられ、それがどのように個人に受け入れられたり疑われたりするののかについて明らかにし、当該社会の人々の苦悩を巡る実践について人類学的な観点から考察するものである。

これまでの申請者の調査から、エチオピア・オロモ社会の多くでは、ハドラと呼ばれる祈祷集会を定期的開催する習慣がみられることがわかった。ハドラとは、アラビア語の「ハドラ(「御前にあること」の意)」からきており、スーフイズム(イスラーム神秘主義)の文脈で神の「臨在」を意味する。スーフイー組織の集会としての意味でも使われ、繰り返し神を念じることや、祈祷句の詠唱など、組織によって異なるさまざまな要素から組立てられる(赤堀 2002)。このようにイスラーム的な特徴を多分に有するハドラであるが、エチオピア・オロモ社会においてはキリスト教徒がハドラ儀礼に参加することも珍しくなく、キリスト教徒のみでハドラを開催することさえあり、同儀礼は宗教、性別、年齢を問わず、苦悩を抱えた人々がそれを吐露し、他の参加者から祈祷を受けたり、霊媒師の口から解決のための助言を与えられたりする機会ともなっている(松波 2014)。

エチオピア・オロモ社会の宗教実践に関する先行研究としては、トリミングム(1952)が概説的に言及しているほか、ブローケンパー(2002)がムスリム・オロモ社会を対象とした歴史人類学的研究を行っている。しかしながら、これらの研究のなかで宗教集会や儀礼への関心は薄く、ハドラなどの苦悩を語る儀礼については極めて言及に乏しい。だが、本研究の学術的独自性はこの点だけではない。

本研究では、病いや貧困といった出来事が自律的・独立的に生じてからそれが儀礼の場へと持ち込まれる、という一方向の手順で把握できるものとして苦悩を定義していない。社会に苦悩を語る場(儀礼)が備わっているからこそ、日々のさまざまな出来事をそこで語りうる苦悩として捉えていく視座が人々に形成されている、というように構築主義的な仕方で苦悩を定義している。これは、苦悩を社会的文脈から切り離れた上で内的に分析する近代医療の仕方とは一線を画すものであり、このことによって、当該社会の文脈に埋め込まれたものとして苦悩を理解するアプローチが可能となる点に独創性・創造性がある。

参考文献

- Braukamper, U. (2002) *Islamic History and Culture In Southern Ethiopia: Collected Essays*, Lit. Writing at the Margin, A. Kleiman, P95-119, University of California Press.
- Trimingham, S. (1952) *Islam in Ethiopia*, Oxford University press.
- 赤堀雅幸(2002)「ハドラ」『岩波イスラーム辞典』, pp.770、岩波書店。
- 松波康男(2014)「シヨワ・オロモの悩みと対処」、『せめぎあう宗教と国家』石原美奈子編、P389-418、風響社。

3. 研究の方法

本研究の調査として、エチオピア・オロミア州およびベニシャングル・グムズ州においてフィールドワークを実施した。現地で参与観察を行い、儀礼参加者を対象とした世帯調査(訪問調査)を実施することで、人々の持つ苦悩の特徴を把握すると同時に、インタビュー調査を通じて苦悩の物語を聴取した。

また、国内外の学会(アフリカ学会及び日本文化人類学会)で中間発表を行い、成果を分担執筆の著作で発表することでフィードバックを得て、再度フィールドワークを実施し、追加調査を実施した。研究の最終年度には、本研究成果の集大成として国際学会で発表を行い研究を締め括

った。

4. 研究成果

研究期間全体のおもな成果は以下2点である。1)2000年代後半エチオピアは経済成長を遂げたが、農村部では国内外の資本による土地収奪が急速に進んだ。調査地では経済活動を巡ってコミュニティの成員同士の関係性が複雑化しており、同時にそこに見られる異なる民族帰属をもつ人々の関係性も緊張化していた。このような社会状況で、当地で定期的に行われている宗教集会在、コミュニティの成員同士のみならず、民族的他者同士のコミュニケーションの経路となっていることが明らかとなった。2)オロミア州東ショア地区で盛んにみられる、イスラームに由来するハドラ集会には多くのキリスト教徒が参加している。その儀礼参加者が実践する地域的な参詣儀礼で人々が経験するランドスケープの聖性、及びその構築性について理解を深めた。

研究に着手した当初、コロナ禍により海外渡航が制限される事態になることは予想できなかった。そのような制限下でも、2019年3月、および同年12月から2020年1月まで、そして2023年1月に短期間ながら現地調査を行うことで本研究を進められた。国内外の学会(日本アフリカ学会、日本文化人類学会、国際エチオピア学会)、国際シンポジウム(東京外国語大学)で議論できたことも当該研究にとって意義深いことであった。本研究の年度毎の成果の詳細を以下のとおり報告する。

2018年度は、9月14日、プレトリア大学(南アフリカ)で開催された国際シンポジウム「Resource Management and Political Power in Rural Africa」(東京外国語大学・プレトリア大学共催)にて、口頭発表(表題: Oromo Nationalism and the Heritagisation in Ethiopia)を行った。当発表では、エチオピアのオロモ民族に注目し、近年生じた世界文化遺産登録運動と対政府抵抗運動という2つの事態がどのような関係するのかを、民族的ナショナリズムを鍵概念として整理した。さらに、2019年3月4日から22日まで、現地調査を実施するためエチオピアを訪問した。当出張では、同国オロミア州における現下の情勢を理解するため、アディスアベバ大学・エチオピア研究所を訪問し、同国の研究者らと意見交換を行った。また、郡・行政村レベルでの動向につき理解を深めるために同州ボサト郡でフィールドワークを実施し、行政官にインタビューを実施したり、集落で参与観察を行い、同地の祈祷儀礼に参加するなどした。その結果、昨年の非常事態宣言下で行われた集団逮捕の被拘束者らが、新首相就任後に解放されていたことが確認できた。この点において、情勢は改善傾向にあると判断できるものの、他方、民族解放戦線の分派の反政府活動が活発化するといった、新たな展開を迎えていることも明らかとなった。

2019年度は、2019年12月18日から2020年1月6日までエチオピアで現地調査を実施した。この調査では、同国西部のベニシャングル・グムズ州の農村社会に暮らす人々の社会・宗教生活について、世帯調査を行うことで把握しようとしてみた。2000年代後半、エチオピアはアフリカ屈指の経済成長を遂げたが、この間、農村部では、国内外の資本による大規模な土地収奪と農業開発が急速に進んだ。これを踏まえ、本調査では、同州の農村社会における土地収奪がどのような仕方で行われたか、そして、それが人々の生活にどのような影響を及ぼしたかについて併せて調査した。また、エチオピアで近年激化している民族間対立の影響についても調査した。調査地では経済活動を巡ってコミュニティの成員同士の関係性が複雑化しており、同時に、そこに見られる異なる民族帰属をもつ人々の関係性も緊張化していた。行政村長や、企業家らへのインタビューからは、土地収奪や農業開発が、集落内の就労形態や人々の関係性を変更させる契機となったことが分かった。このような社会状況で、当地で定期的に行われている宗教集会在、コミュニティの成員同士のみならず、民族的他者同士のコミュニケーションのチャンネルとなっていることがこの調査で明らかとなった。

また、2020年1月23日には、アフリカ内外の精霊信仰に関する国際ワークショップでオロモの人々の信仰に関する研究報告を行なった。エチオピア・オロミア州にみられる憑依現象について報告し、学術領域を超えて、さまざまな人文系研究者らから建設的なコメントを得ることができた。

2020年度は、石原美奈子(編著)『愛と共生のイスラーム—現代エチオピアのスーフイズムと聖者崇拜』の分担執筆を行なった。これは、2019年末から2020年のはじめに報告者が本によって実施したフィールドワークに基づくものである。報告者は同稿で、デルグ政権期からアビィ・アフメド政権の樹立期までに、エチオピア西部ベニシャングル・グムズ州のオロモ・コミュニティであるヤア村が、政権の移り変わりとともにどのように変遷してきたかを示した。ここ半世紀のなかで、エチオピアの政局が大きく変動した機会である、1974年の軍部主導の社会主義政権、1991年のエチオピア人民革命民主戦線(Ethiopian People's Revolutionary Democratic Front: EPRDF)政権、そして2018年のアビィ政権樹立の時期にヤア住民の社会、経済、宗教生活がどのような変化を経験したかを、フィールドワークに基づき報告した。

また、本研究課題で対象とするオロモのコミュニティに関する論考として、「エチオピア 非常事態宣言の発出と農村社会」(『月刊地理』に載録)を執筆した。2018年の非常事態宣言発出時に、オロミア州東ショア県の農村社会の住民が経験した集団逮捕などの混乱について、フィールドワークに基づき報告した。さらに、2020年5月には、当初の計画通り日本文化人類学会で上記に関連する研究発表を行いフィードバックを得ることができた。

2021年度は、査読付きプロシーディング(表題: Where Muslim Spirits Possess Christian Mediums:

The Hadra Meeting in Boset, Ethiopia) を執筆した。エチオピア・オロミア州東シヨア地区のオロモのコミュニティで盛んにみられる、もともとはイスラームに由来するハドラ集会に多くのキリスト教徒が参加していることを報告しつつ、これとエスニシティや地方史との関連について議論した。また、日本アフリカ学会第 58 回学術大会で、「エチオピアの国内投資家による土地取引と民族間関係 ベニシャングル・グムズ州の「農業開発」と排斥運動」という表題で報告を行い、エチオピア・ベニシャングル・グムズ州にみられる土地収奪について、同国の資産家たちの関与に注目し、それが内政やエスニシティとどのように関わるかを議論した。

2022 年度前半には、本科研の締めくくりとして国際学会で発表した（表題：Sacred Landscape on the Move: From the Pilgrims' Point of View）。地域的な参詣儀礼についてオロミア州の事例に基づいて議論した。同学会での参加者間の議論は翌年のワークショップに繋がり、宗教儀礼の理解を深めた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Yasuo Matsunami	4. 巻 2
2. 論文標題 Where Muslim Spirits Possess Christian Mediums The Hadra Meeting in Boset, Ethiopia	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ASC-TUFS Working Papers	6. 最初と最後の頁 261-274
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.51062/ascwp.2.0_261	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 松波康男	4. 巻 65(6)
2. 論文標題 エチオピア 非常事態宣言の発出と農村社会	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 月刊地理	6. 最初と最後の頁 96-102
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 松波康男、橋本絵莉（共著）	4. 巻 65(9)
2. 論文標題 あの時を振り返って（特集 フィールドの安全対策を考える）	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 月刊地理	6. 最初と最後の頁 52-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 松波康男	4. 巻 57
2. 論文標題 「南スーダンにおける紛争解決合意（ARCSS）」署名を巡るIGAD加盟国の関与	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 アフリカレポート	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 松波康男
2. 発表標題 エチオピアの国内投資家による土地取引と民族間関係 ベニシヤングル・グムズ州の「農業開発」と排斥運動
3. 学会等名 日本アフリカ学会
4. 発表年 2021年～2022年

1. 発表者名 Yasuo Matsunami
2. 発表標題 Where Muslim Spirits Possess Christian Mediums: the Hadra Meeting in Boset, Ethiopia
3. 学会等名 ASC-TUFS 5th Anniversary International Symposium
4. 発表年 2021年～2022年

1. 発表者名 松波康男
2. 発表標題 紛争との遭遇:南スーダンの事例から考える大使館との付き合い方（分科会 時流にあわせ「フィールドワーカーの安全対策」について考え備えるには）
3. 学会等名 日本文化人類学会第54回研究大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Yasuo Matsunami
2. 発表標題 Healing Ritual or Cause of Suffering: Spirit Possession in Rural Ethiopia
3. 学会等名 TUFS special seminar Contemporary Spirit(ual): Cults Revival or Continuity? -An Interdisciplinary Workshop-（国際学会）
4. 発表年 2019年～2020年

1. 発表者名 松波康男
2. 発表標題 南スーダンの紛争解決に対するIGAD構成国の関与
3. 学会等名 日本アフリカ学会第55回学術大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yasuo Matsunami
2. 発表標題 Oromo Nationalism and the "Heritagisation" in Ethiopia
3. 学会等名 UP-TUFS Seminar 2018 (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 石原美奈子 (編著)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 春風社	5. 総ページ数 552
3. 書名 愛と共生のイスラームー現代エチオピアのスーフィズムと聖者崇拜	

1. 著者名 澤柿教伸、野中健一、椎野若菜 (編著)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 古今書院	5. 総ページ数 188
3. 書名 フィールドワークの安全対策 (FENICS 100万人のフィールドワーカーシリーズ9)	

1. 著者名 松本尚之、佐川徹、石田慎一郎、大石高典、橋本茉莉（編著）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 昭和堂	5. 総ページ数 288
3. 書名 アフリカで学ぶ文化人類学	

1. 著者名 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所	4. 発行年 2019年
2. 出版社 東京外国語大学出版会	5. 総ページ数 33
3. 書名 FIELD PLUS no.22 (フィールドプラス)	

1. 著者名 八木 久美子（著，編集）	4. 発行年 2023年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 714
3. 書名 イスラーム文化辞典	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------